



医療法人近森会

びろっば 3

Vol.236

発行 ● 2006年2月25日

www.chikamori.com 高知市大川筋一丁目1-16 〒780-8522 tel.088-822-5231 fax.088-872-3059 発行者●近森正幸/事務局●川添昇

心臓血管外科チーム 心臓弁膜症と心臓バイパス手術 最高ランク「AAa」と全国6位に

日本経済新聞の「実力病院」日経・日経メディカル調査で

この2年余りで数々送られてきた新聞社や雑誌社のアンケート。そのなかで極めて詳しい調査結果や分析が返送されたのが唯一、日本経済新聞の「実力病院」日経・日経メディカル調査・バイパス手術治療成績編（2006年1月8日付）と心臓弁膜症編（同年1月22日付）、「過程」編（同年2月5日付）だった。

これらの調査で近森病院は「過程」編の外科191施設中で6位に、バイパス手術編では全国上位18施設、また弁膜症編では上位19施設に入る最高ランクの「AAa」の評価を受けた。そこで、心臓血管外科ハートセンターの入江博之部長に、その根拠にもなる心臓血管外科の治療システムについて説明してもらった。

▼常時DVD録画されている手術室



入江部長がまず強調する心臓血管外科の五大特徴は、

- ①的確で迅速な手術
- ②ミスを犯しにくい統一した管理システム

- ③合併症を未然に防ぐ早期離床
- ④多職種との緊密な連携
- ⑤他院他施設との緊密な連携、である。

この五大特徴の背景として、まず①については、最良と思われる標準術式を決め、通常の手術では毎回これを繰り返すことで、常に的確で迅速な手術が可能となる、というもの。

同様に②については、患者さんの術前術後の管理方法を統一し、毎回正確に同じことを繰り返すことで、スタッフの腕は熟練するし、ミスは最小限に抑えることが可能となる。通常と違うことが起こっても修正可能な範囲に抑えられる、というもの。

③心臓手術を受けたあと手術室で話ができる率が85.45%、翌日に歩行ができる率が80.00%、翌日に食事ができる率は92.73%と極めて高い回復率が示されている。これもスタッフ各自が通常の手順から外れることなく着実にやるべきことをやるというシステムができていたため。それが術後の早期離床につながる、というものである。

④毎朝8時30分から内科、外科のドクター・ナースも交えたハートセンターチーム全体のミーティングを行ない、情報共有と治療方針の決定・徹底に努めているということ。 ※次頁へ

ものを持たない幸せ

近森 正幸



現代は物欲を^こ蓄じさせるような広告や宣伝が溢れる社会になっているように思う。

私は病院の理事長として他から見ると金銭的に恵まれているようだが、自分の土地も家も持っていないし、ローンもない。自動車を運転したくないので、遠くへ行くときはもっぱらタクシーを利用し、近くで急ぐときは自転車である。船酔いするのでヨットやモーターボートもいらない。

別荘をもつより、素敵なホテルに泊まる方がずっと楽しくて経済的だと思っている。

ものは考えようで、なにも持っていない方が、煩わしいこともなくずっと楽で自由だと思う。

東京八重洲口にブリヂストン美術館がある。上野の美術館と違ってお客さんが少なく、ゆっくりと印象派の絵画を観ることができる。部屋には一人がけの椅子があって、ゆったりとしていて、あたかも自宅のリビングで自分の絵画を観ているような、豊かな時間を感じた。

いま振り返ると、住む家を買わなくてよかったし、土地などに投資しなくてよかったとつくづく思う。自然とそんな生き方になってしまったが、かえって自由な心でいられることは、思いもよらない収穫である。

(理事長・ちかもり まさゆき)

※前頁より続きます。⑤退院時に手術記録をはじめ詳細な情報交換を行ない、必要に応じて迅速な搬送を行なうなど、タイミングを外さない連携を心がけている、というもの。

入江部長は、「チームとしての努力を続け、今後さらに高いレベルの医療を目指したい」と確信に満ちたようすで締めくくった。


「実力病院」日経・日経メディカル調査

バイパス手術の上位病院

病院名	所在地	過程	治療成績	症例数	うち待機的手術	死亡率(%)
【北海道・東北】=5病院						
帯広病院★	北海道	A B a		285	228:0	0.0
市立旭川病院	北海道	B A a		288	257:2	0.8
北海道循環器病院	北海道	B A a		134	126:1	0.8
仙台厚生病院	宮城	A A a		398	356:4	1.1
山形県立中央病院	山形	B A a		186	147:0	0.0
【関東】17病院						
水戸済生会総合病院	茨城	A B a		124	118:4	3.4
自治医大病院	栃木	A A a		176	155:2	1.3
獨協医大病院	栃木	A A a		255	205:4	2.0
自治医大宮医療センター	埼玉	A A a		442	401:2	0.5
近畿大京十字病院	愛媛	A A a		120	110:1	0.8
近森病院	高知	A A a		238	211:1	0.5
【中部・近畿】=3病院						
広島市立安佐市民病院	広島	A A a		227	163:2	1.2
愛媛県立中央病院	愛媛	A A a		125	108:0	0.0
松山赤十字病院	高知	A A a		238	211:1	0.5

感染予

「実力病院」日経



▼日本経済新聞「実力病院」調査より

「実力病院」日経・日経メディカル調査

弁膜症の上位病院

病院名	所在地	過程	治療成績	症例数	死亡率(%)	死亡率(%)	弁形成の割合(%)
【北海道・東北】=7病院							
砂川市立病院	北海道	A B a		54	0	0.0	18.8
市立旭川病院	北海道	B A a		177	1	0.6	30.8
帯広病院※	北海道	A B a		168	1	0.6	27.7
仙台厚生病院	宮城	A A a		208	4	1.9	10.3
秋田大病院	秋田	B A a		120	3	2.5	33.8
山形県立中央病院	山形	B A a		173	5	2.9	21.2
福島県立医大病院	福島	A B a		75	2	2.7	40.0
【関東】=19病院							
水戸済生会総合病院	茨城	A B a		85	4	4.7	38.8
自治医大病院	栃木	A A a		173	3	1.7	10.2
群馬県立心臓血管センター	群馬	B A a		236	6	2.5	14.1
自治医大宮医療センター	埼玉	A A a		271	3	1.1	37.0
新東京病院	千葉	A A a		273	5	1.8	42.5
千葉市立中央病院	千葉	B A a		193	1	0.5	24.4
【近畿】=7病院							
京都大病院	京都	A B a		148	1	0.7	41.8
大阪労災病院	大阪	A B a		136	0	0.0	42.5
岸和田徳洲会病院	大阪	B A a		201	4	2.0	49.3
大阪大病院	大阪	A A a		110	2	1.8	35.0
大阪府立中央病院	大阪	A A a		491	1	0.2	34.8
愛媛県立中央病院	愛媛	A B		120	1	0.8	51.9
近森病院	高知	A A a		238	211	0.5	11.3
【中部・近畿】=3病院							
心臓センター柳井病院	岡山	A A a		430	4	0.9	37.0
広島市立安佐市民病院	広島	A A a		61	1	1.6	13.9
愛媛県立中央病院	愛媛	A B a		184	5	2.7	22.8
近森病院	高知	A A a		113	2	1.8	27.3
【九州・沖縄】=3病院							
福岡県立中央病院	福岡	A A a		590	20	3.4	55.9

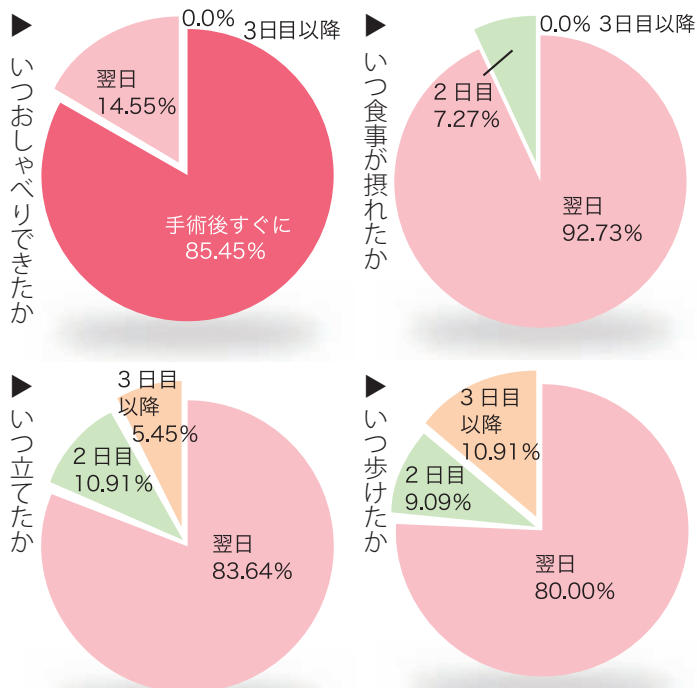
「実力病院」日経・日経メディカル調査 心臓弁膜症編

「過程」部門の上位病院

▼過程 チーム医療など医療の質を高める取り組みの充実度。今回の調査では、院内死亡率などの「治療成績」、スタッフや設備の充実度を示す「構造」と合わせた計3部門で病院を評価した。「過程」の主な調査項目は、①治療計画表(クリニカルパス)があるか②診療情報の開示に関するマニュアルがあるか③セカンドオピニオンに積極的に対応しているか—など。

【内科】368施設	【外科】191施設
1 済生会熊本病院 熊本 86	1 国立循環器病センター 大阪 88
2 千葉西総合病院 千葉 83	2 済生会熊本病院 熊本 86
2 山梨大病院 山梨 83	3 武田病院 京都 81
4 東京都済生会中央病院 東京 80	4 高松赤十字病院 香川 80
4 県立岐阜病院 岐阜 80	5 帯広病院※ 北海道 79
4 大阪厚生年金病院 大阪 80	6 県立循環器呼吸器病センター 神奈川 77
4 徳島赤十字病院 徳島 80	6 マツダ病院 広島 77
8 武蔵野赤十字病院 東京 79	6 近森病院 高知 77
9 日本医大千葉北総病院 千葉 77	9 東邦大医療センター大森病院 京 76
9 県立医療センター 広島 77	9 近森病院 高知 77
10 近森病院 高知 77	10 近森病院 高知 77
3 県立中央病院 石川 75	12 立川総合病院 新潟 75
4 近森病院 高知 77	10 近森病院 高知 77

▼冠動脈バイパス術後の経過について



口のリハビリテーション

第二分院での取り組み

近森会口のリハビリテーション委員会に第二分院代表として私が参加し始めたのが2004年、第二分院が口のリハビリ委員会を立ち上げ活動をはじめたのが2005年4月からのことです。

メンバーもまだ、各病棟の看護師1名計4名が「口をきれいにしよう」を

合言葉に、

①スタッフ全員が口腔ケアの手技をマスターする(口のリハビリテーション初級講座の参加・歯科衛生士による口腔ケアの講義) ②委員会で各病棟の現状や問題点を報告し解決方法を考えていく ③口腔内アセスメントシートをつくる—を目標に動き始めたところです。

精神科の口リハは本院やリハ病院と違い、精神障害の病因・病態、服薬状

況などにより特有な問題や特徴が認められ、精神疾患のある人の口腔症状の特徴と疾患や服薬との関係についての研究が最近すすめられています。まだ、不明な点が多いのが現状です。

その中で徐々に知識をつみ経験を重ねていき、口リハの活動を確かなものにしていきたいと思います。(第二分院3階病棟 看護師長 中島久美)



全国回復期リハビリテーション病棟 研究大会

2006年2月3、4、5日の3日間、近森リハビリテーション病院が担当となり、第7回研究大会をここ高知で開催した。全国から658人の皆さまの参加をいただき、盛会の裡に全日程を終了した。大会長を務めた栗原正紀院長から総括していただいた。



大会長
近森リハ病院
院長
栗原正紀



回復期リハ病棟の原点、ここにあり

歴史の重みと信頼関係の深さ実感

大会の運営は全て近森リハグループの手作りで行ないましたが、理事の方々や多くの参加者から「みんなのチームワークの良さが窺われ、底に流れる近森の歴史の重みとスタッフ間の信頼関係の深さが感じられたとても素晴らしい大会」などと、最高のお褒めの言葉を戴くことができました。まさに本大会は回復期リハ病棟の原点であ

る近森の底力を発信したといっても過言ではないと実感した次第です。大会長としてこの上ない至福の時を過ごさせていただきました。

大会運営に直接携わったスタッフばかりでなく、勤務で病院を守ってくれた多くの方々、そして、縁の下の力持ちとして支えていただいた石原産業の石原社長やお仲間などなど本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

回復期リハ病棟の第2ステージ

今回、大会テーマを「回復期リハビリ病棟からの発信」としました。今年は、はじめて診療報酬と介護報酬の同時改定を迎えることもあり、発足以来5年間を経過した回復期リハ病棟にとって、いろんな意味で“第2ステージ”と捉えることができます。これまでの経験や実績から急性期や維持期との質の高い連携のあり方やこれからの回復期リハ病棟のあるべき姿を熱く議論していただくことにしました。

そして地域における回復期リハ病棟の役割として、今後、何を積極的に発信していくべきかをしっかりと見定めたいこうと企画したものです。

「職場の悩みを解決します」

幸い、大会の3日間は天候にも恵まれ、全国津々浦々から多くの仲間の参集していただき、最終的に昨年を上回る658人の参加を得ることができました（演題数122題：一般演題64、ポスター58）。

また、特別企画として大会2日目の夕方からは桂浜の国民宿舎貸切でナイトセミナー「リハ塾」を開催し、セミナー1では中堅が対象で「ここで差がつく管理運営」と題してファシリテーションについて学んでいただきました。

セミナー2では「職場の悩みを解決します」と題し、若手を対象として座談会形式で実施。助言者として石川誠氏（初台リハビリテーション病院理事長）、浜村明德氏（小倉リハビリテーション病院院長）、斉藤正身氏（霞ヶ関病院理事長）とわたくしが参加し、これにも総勢100人を越える参加者があり、各地からの地酒の持参も加わり、若手は明け方まで語り合うような賑やかなセミナーとなりました。

院外エッセイ

丁寧できちんとした毎日



手作りケーキの店
「レフジェ」店主 岡崎 美智

1966年生まれ。1986年3月RKC調理師学校卒、1986年4月高知第一ホテル入社、その後、県立美術館ピチカート入社、1997年7月「レフジェ」開店。

「40歳になったら、ガクッと体力が落ちるきねえ」と、2~3年前からいわれ始めました。自分はそんなことはない！ 体力には自信があると思いついていましたが、一昨年は風邪を拗らせて肺炎にまでなっていました。疲れが一晩でとれず、ちょっとした切り傷が3~4日痛んだり張り切っているが、確実に体力は落ちてきているなあと感じ始めておりました。母から一喝「もう若いつもりで居ってもいかに、外から補うちゃらんと」と諭され、やはり人生の先輩、素直に聞くことにしました。

仕事から食べる物から考え直して即実行。お米を食べる。以前の食事といえば、一日にお米を口にするのは一食有るか無いかでした。今ではほとんど三食お米を食べるようになりました。

季節の野菜を食べる。自宅には両親のおかげで、家族で十分に食べられる菜園が出来、虫に食べられるのが先か、家族が食べるのが先かと毎日新鮮な野菜を拵えてくれるようになりました。お店で使った後の玉子の殻や、コーヒー豆のカスは持ち帰り菜園にまき



ます。電気分解したおいしいお水、還元水を飲み始めました。あと、仕事を始めると一日中立ちっぱなしなので、わざわざ身体を動かすことなど考えもしなかったのですが、時間を見ては身体を動かすよう心がけ、座って出来ることは椅子に腰をかけてするようになりました。座るようになったのは、やはり歳のせいかなあ……。

あとひとつ睡眠のこと。店を一人で切り盛りするためには、どうしても睡眠時間を削ってしまいます。もし1日が30時間あったとしても増えた時間を睡眠時間に回せそうにないのが、いまいちばんの悩みでしょうか……。

自宅ばかりでなく、店のコーヒーももちろん還元水を使用しています。ケーキには、原料に近い自然食をと心がけ、きび砂糖、黒糖や全粒粉を使ってみたり、素材として豆乳、ごま、きなこなどを使ったケーキ作りを日々試作中。体力の衰えを感じつつも、元気でかわいいおばあちゃん目指して、毎日おいしいケーキ作りに励んでいます。

2006 診療報酬改定にあたって

かいた汗に見合う改定

今回の改訂はこれまでの単なる点数増減とは違い、政策誘導で所期の目的に達した項目はバツサリと廃止し、こ

第13回クリニカルパス大会報告

日常業務の軽減化にも

第13回を迎えた今回は2005年12月17日(土)に開催されました。泌尿器科の経尿道的尿管碎石術のパスで行われ、院外30名(県外13名・県内17名)・院内104名の計134名の参加が得られました。

今回は院内のパスの運用を中心に新しいパスがどのように外来から病棟へまた病棟から各職種へと連絡が行くかなど活発な議論が行われました。内容的には服薬指導や栄養指導などがあり、ほうれん草は尿管結石を助長しやすい(ポパイは尿管結石?)などこれまで知らなかった新しい知識も勉強でき有意義でした。

本年4月から当院にもDPCが導入されます。パスは患者管理の手法なので医療体制とも密接に結びついています。DPC導入で在院日数はさらに短縮化が予想され、パスで業務を効率的に行わないと、とても忙しくてといった事態が予想されます。入院時書類やオーダーの一括指示など日常業務を軽減化したいと考えています。

また、患者サイドには手抜き医療の不安が生じますがパスで説明することにより必要な検査・処置などがきちんと組み込まれていることを説明できます。

トピックスでは輸血療法委員会から畠中先生・栄枝先生の輸血後感染症のミニレクチャーがありました。こういったことが病院全体として議論されることが重要ですね。次回は3月18日に形成外科の鼻骨骨折のパス大会を高知会館で予定しています。パスの主役はどうしても看護師さんですので多数の参加をお願いしたいと思います。

(クリニカルパス委員会委員長 高橋潔)



管理部長 川添 昇

れからも必要なものは評価(増額)を行なっている。

医療費4千億円の削減のために前者で9千億円の減、後者で5千億円の増を行ったといわれている。前者あるいは後者にどれだけ軸足を置いているかによって、医療機関の収入に大きな影響が出てくると思われる。

近森病院については、機能分化と地域医療連携を促進させるための評価としての紹介率に関する急性期特定病院加算などの廃止により、軒並み大きな減収をきたしたが、救急医療管理加算の日数拡大や地域医療支援病院、摂食機能療法の評価などによる増収で何とかカバーできる見込みである。これまで汗をかいてきたNSTも栄養管理実施加算としてわずかな点数ながら評価されたことは嬉しいことである。これは、4月から当院も参加が予定されているDPC(診断群分類別包括評価)に

対して、コスト管理面で抜群の威力を発揮してくれるものと期待される。

リハビリテーションについても、下図のように厳しい評価換えが行なわれることとなった。これにより維持期のリハビリテーションは全く認められなくなってしまうが、幸い近森リハビリテーション病院は全病棟回復期リハビリであり、いずれの疾患も限度日数以内で行われているため、減額はなんとか回避することができた。むしろ算定単位の上限緩和により重点的にリハビリを行い治療効果が期待できることとなり増収も計られることとなりそうである。スタッフの努力の報われる結果となれば嬉しい限りである。

精神科の第二分院についても平均在院日数が80日前後と短く、入院料の早期評価による増収は有難いことである。

こうして近森会各施設を見てみると、今回の診療報酬の大幅改定減をなんとか乗り越えることができたのは、いずれも医師をはじめスタッフの絶え間ない努力があつてこそと思う。

今年はDPC元年、電子カルテの本格稼働の年である。明るく一步一步近森会の医療の質の向上にみんなで邁進していきたいと思っている。

リハビリテーションの体系【見直し】

	脳血管	運動器	呼吸器	心大血管
対象疾患	脳血管障害・脳外傷・脊髄損傷・高次脳機能障害など	上・下肢の外傷・骨折の手術後など	肺炎、開胸手術後、慢性閉塞性肺疾患	急性心筋梗塞、狭心症、開心術後、慢性心不全、冠動脈バイパス術後など
リハビリテーション料(I)	250点	180点	180点	250点
リハビリテーション料(II)	100点	80点	80点	100点
算定日数上限	180日	150日	90日	150日

乗馬。この開放感！ 将来は馬主に！！



これは以前通っていた徳島の乗馬クラブに、結婚の前撮り写真を撮りに行った時のものです。本当はウェディングドレスで馬に乗りたかったのですが、残念ながらそれは叶いませんでした。高知に来てからはあまり乗りに行けていませんが、私たち夫婦の暗黙の了解で旅行は乗馬ができることを条件に選び、旅先できれいな景色のなか楽しんでます。馬場のなかを走るとの違い、表現できない程の開放感が好きです。将来はこの馬のように目が愛らしく、かっこいい馬を持つことが夢です。

医療福祉部 第二分院相談室 池澤 景子



出張報告●医療に活かす コーチング技術セミナーに出席 コミュニケーション 基本は「傾聴」から。 ただ一心に聴く ということ

きただい とせ
北代 都世
新館5階東病棟



リハ2階西病棟
三木 和佳子

コミュニケーション委員として活動するなかで今回「医療に活かすコーチング技術セミナー」に出席させていただきました。

医療の現場は人と人との関係が基本です。患者様は様々な制限をされ、また障害を伴うというストレスのたまりやすい状況に直面しています。そんな患者様は他者へ向けて攻撃的な態度となってしまうことが多くあり、医療従事者はそのことを理解し、吐き出されるストレスを受け止め、良い働きかけができるようではなりません。そのために特別な助言が必要となるわけではなく、患者様自身が「自分はどうすべきなのか」ということに気づくことで、そのゴールへ向かうために

何ができるか・何をすべきかという答えへたどり着くことができるのです。しかし、患者様一人でそこまでの答えを導き出すことは容易ではないため、医療従事者が答えを導き出すためにサポートすること)となる必要があるのです。

コーチングという技術には傾聴・質問・承認・提案と大きく4つの技術が必要となります。最も重要となる技術が傾聴であり、コーチングの7割を占めています。コミュニケーションの基本もまた傾聴することから始まるといわれています。傾聴することで患者様との信頼関係を築き、より話しやすい関係を持つことで質問へと移行していきます。患者様の中に答えを導き出すために「WHAT」「HOW」の質問を投げかけ、時に迷う相手を導き出すためのヒントを与えることはあるものの、基本はその人自身の中に答えがあるということを忘れてはいけません。あくまで指導でなく、本人における気づきとなるように働きかけることなのです。そのためには①どうなりたいのか願う②そのことを思い続ける③自分ならできると信じる④そうなるよう行動することが必要となります。あくまでコーチは援助者であり答えは相手が出すものだとして充分理解した上で成り立つため、コーチは相手を100%信用することが必要となるのです。

日々の業務を振り返ると、患者様に對し指導的な内容の指示が多かったといえます。しかし今回のセミナーにより、指導者として患者様と向き合うばかりでなく、相手がどうしたいのか共に考えるパートナーとなることも必要であると実感しました。

キラリと光る看護 その24 愛ある家族は主治医

平成18年度の診療報酬改定が出ました。医療機能の分化と連携を推進する視点から在宅療養を支援する方針もぐっと強く打ち出されています。



「高齢者ができる限り住み慣れた家庭や地域で療養しながら生活を送れるよう、また、身近な人に囲まれて在宅での最後を迎えることも選択できるよう、支援していく体制を構築することが必要」とあります。

近森会では15年前から在宅介護支援センターや訪問看護ステーションを立ちあげてきましたが、その歴史と共に在宅でがんばっておられる方が何人もおられます。その方たちはご家族が飛びぬけて愛情強く努力と忍耐の日々を重ねておられます。

先日でも高齢のAさんが血糖のコントロールと家族の介護疲労をサポートすることを目的に数日間入院されました。頸椎損傷で四肢麻痺、気管切開による頻回の吸痰や気切孔の処置、吸入、毎日の陰部洗浄、週2回の入浴、褥創予防対策の観察と2時間毎の体位変換、胃瘻からの水分や栄養補給、その管理と入院中の看護は大変ですがご家族は家庭で見事に24時間行なっておられるのです。そのご家族から「この病棟はとてもしっかり看護がいいです。お願いしたことがきちんと全員に通じます。他病棟では何回も同じことを言わないといけなかったり、家族のやり方を受け入れてもらえなかったりしたこともありました」というお声を戴きました。

師長にどんな風に指導しているの?と聞くと「闘病が長い方ですのでご家族が主治医みたいなものです。ご家族の気持ちを大事にする看護を徹底しています」という答えが返ってきました。

在宅看護をしている家族をサポートするという事は家族の力に対する畏敬の念と謙虚に学ぶ姿勢ということだと思えました。(看護部長 梶原和歌)

ハッスル研修医・最終回

『ハッスル研修医』と題して、研修医を紹介するこのコーナーもはや私で最後の10回目となりました。近森病院の初期研修プログラムは、1年目は内科6カ月、外科3カ月、救急・麻酔科3カ月の研修を行い、2年目は小児科、産婦人科、精神科、地域保健医療を5カ月、選択科を6カ月研修する予定です。今年の4月からはまた新しい研修医が入ってきます。

私たちが研修医として働きだし早くも1年が経とうとしています、どれくらい実力をつけることができたのでしょうか。先日、院内旅行で北海道にいかせてもらったときこんな出来事がありました。私が友達のT君とゲレンデでスノーボードを楽しんでいたときのことで。私の前方を滑っていたT君が不意に雪に足を取られ、勢いよく転倒してしまいました。あまり大きさに考えずT君の元へ行くと、T君は左肩を押さえ苦痛の表情でうずくまっています。なんとT君は肩を脱臼していたのです。私は苦痛に顔をゆがめるT君をみているといてもたってもいられず、その場で肩を入れようと試みました。しかしいくらがんばってみてもいっこうにT君の肩は元には戻ら



▲ゲレンデのカツカレー

研修医 三木 俊史

てはくれません。ゲレンデの真ん中で変な行動をとっている男二人の横をまわりは白い目で見ながら颯爽と滑り降りていきます。結局私はあきらめ、T君はレスキュー隊のスノーモービルに乗せられ医務室へと運ばれていきました。私はそのT君の背中をみながら自分の無力さに歯を噛み締め、もっとがんばろうと拳を握り締めました。こんな私もその時の悔しさを忘れず、今こうして働いています。

因みにかの大横綱千代の富士は、度重なる肩の脱臼によりほんの少しのあたりでも肩を脱臼してしまい、一時は相撲をとるのもままならない状態でした。しかし千代の富士はそんな苦勞と、血の滲むような努力の末に自らの肩に筋肉の鎧を作り上げ、大横綱への道を駆け上がっていったのです。私もそんな横綱になりたいと思っています。

心に灯のともる古里



一
地
緒
元
の
宿
の
人
も
に
記
念
撮
影

キ
ミ
子
と
ん

近森リハ病院
総看護師長 田村 キミ子

昨年の10月、45年ぶりで小学校時代の同級生に会った。私の生まれた吾川村名野川の小学校の同窓会が開かれたもので、もともとは55歳以上になったら名野川小学出身者の集まる「同校友会」への出席資格ができ、その会に出席した折に、同窓会をやらうと話がまとまったものだった。

45年ぶりとも簡単にいうけれど、気の遠くなるような昔の思い出を辿ってみようとしても、何にも思い出せないし、思い出そうとする時間さえ持たないままに出席した。

いまは宿泊施設になっている名野川小学校のもうひとつ奥の下名野郷に、同窓会の夜は10人ほどが集まって、それこそ寝るのも忘れて話に花を咲かせたことだった。45年のブランクの不安なんか吹き飛ばすほどに、それぞれが思い思いに近況を語り合った。昔はおとなしくて優しいだけの印象だった彼女は、とんでもない苦勞をしょいこみ、でもそんなことに負けず、すぐ前向きに生きていたし、だんだんと身体が言うことを聞かなくなったと嘆きつつも皆、それぞれに何かしら明るい希望を見だしているようで、その底抜けなプラス志向の考え方には大いに私も力を与えられた。

歳を重ねるほどにどうしてこんなに古里が懐かしくなるんだろう、幼なじみがいいんだろうと、自分の心にホッと灯がともったようになるわけを考えてみた。親に守られ、友達や近所も皆自分の身内みたいな距離の近さで生きていた子ども時代、そんな風に保護され、かばわれていた時代を思い出せば、それだけで何か安心感が増すような錯覚を覚えてしまうこのごろ。

これからもがんばって、自分を大事に、自分と関わる皆を大事にしながら、また元気に逢いましょう！と再会を誓って懐かしの古里をあとにした。

聴診器

3連休、空白の……

私には、まだ幼い子どもがふたり居ます。育児は、妻と共同で行うもので、仕事に育児を両立させなければなりません。子どもができここ数年間は、好きな釣りも行けずじまいになっています。2005年12月にある透析施設より、釣り大会を行うと一報がありました。私はここぞとばかりに妻へ詰めより、釣り大会に参加をすると伝えた承を得ることに成功しました。

職場の同僚と釣りの師匠へも連絡をし、スケジュール調整等、準備を整えました。初めての釣り場では、情報収集が大切です。インターネット・航空写真・釣り情報等から予想を行います。

さらに、何を釣るのかによって仕掛けも考えます。この準備期間も楽しい一時です。釣り大会前の週間天気予報で、大寒波が予報されました。前日大雪の報道もあり、渡船より船が出ないと連絡を受けました。私と同僚は「まあ、しかたないね」とがっかりでした。

ここで喜んだのが、妻と子どもでした。事前にスケジュール調整で3連休を取っていたので、空白の3日間であり用事を言うことはできません。言うまでも無くこの3日間は子どもに捧げ、ぐったりでした。

(看護部透析室 看護師長 西村 剛)



科長昇任 抱負

2006年1月1日付で心臓血管外科科長を拜命した。

折しも、当科は、最近の『日本経済新聞』の全国評価で、冠動脈バイパス手術部門(1月8日掲載)、弁膜症手術部門(1月22日掲載)において、最高ランクであるAAaの評価を受け、また、診療過程では、外科部門で全国第6位の評価を受けた(2月5日掲載)。〈※『ひろっぱ』1、2面参照〉このような診療

ができるのは、循環器内科、麻酔科、透析科などをはじめ、各科の先生方の強力なサポートのおかげであり、技術面はもとより先見性と強力なリーダーシップを持ち合わせた入江博之部長の指揮のもと、看護師、理学療法士、各部門の技師さんたち、事務関係の人々など、様々な職種(プロ)の協力体制がうまくいっているおかげだといつも感じている。私自身は2003年春に当院に転動してきたが、今までに知っているどの病院よりも、その協力体制は柔軟で、スムーズで、発展的であるだけでなく、どのスタッフも気前がよく前向きであり、とても仕事がしやすいと感じている。協力体制といえば、院内だけでなく、手術の必要な患者様を、手遅れになることなく紹介して下さり、手術が終わればまた日常診療や内科的治療をこころよく引き継いでくださる県内各地の病院、医院の先生方の存在もとても大きい。

かかりつけ医と専門医の役割分担の必要性が世間でも言われるようになってきているが、すでに我々の周囲ではそういう協力体制で診療を行っていることに、感謝の気持ちを感じているし、さらに新しい先生方からのご紹介やご相談にも、誠心誠意、対応させていただくことで、良好な協力関係をより広く発展させていければ、と考えている。

このたびは、そのような状況下で科長に昇任させていただいたので、責任の重さを痛感している。入江部長をサポートしながら、周囲の方々に少しずつでも恩返しができるように、微力ながら、貢献していきたいと思う。

心臓血管外科科長 池淵 正彦



穏やかな人生に 秘められた思い

育った環境、といっても、とくに兄弟姉妹の人格形成に及ぼす影響は計り知れないのではないかと、ふと思わせるのは、例えば刈谷さんのようなお人柄に接するときではないだろうか。

院内ではいうまでもなくアスティス社内でも、刈谷さんが立腹したり、「カリカリ」なっているところを見た人は居ないのではないかと。何の疑いもなくそう思わせるほどに、刈谷さんはいつも穏やかな柔らかい人当たりで、けっこうなお人柄を滲みだしている。

ほぼ年子の姉三人のあとに生まれた末っ子の長男。よくぞ生まれてくれた大事な跡取り！とばかり大事に育てられ、お姉さんたちとはよくママゴトをした思い出があるという。今でも行き来の盛んな大の仲良し一族でもある。

アスティスの前身に当たる和光薬業の前身に、高校卒業後就職。指先が器用で料理が好きだから調理師にもなりたかったが、鶏肉が大の苦手だから諦め、市役所勤めの父上から薬品卸の仕事勧められ、素直に従ったものだった。四万十川の下流域に生まれ育ち、就職後も10年近くは宿毛方面に暮らした。

昭和53年に高知市内への転勤が決まり、近森病院の担当になって以来28年、刈谷さんの言葉では「ちかもりひとすじ、院長先生はじめ皆さまにどれほどお世話になったことか……」と、なにがどのように有難かったか、事細かにご説明いただいたが、スペースの都合で全て割愛。ただ、平成12年4月から始まった

▼沖本朝子薬局長と打ち合わせ中の刈谷さん



在庫一元化管理システム (SPD) の導入は、刈谷さんにとって「印象に残る大事業……」だった。

頑固一徹亭主関白の父上を持ったことが、これはきっと好ましく作用したのだろうが、職場結婚した奥さまには、「営業所勤務の間もずっと電話番をしてもらったり苦勞のかけっ放しだったから」、その償いというわけでもないのだろうが、仕事が休みの土日はせめて妻にゆっくり休んでもらえるようにと、どうやら刈谷さんは掃除をしたり得意の料理を準備したりと、けっこう尽くしているらしい。

基本的に、奥ゆかしく控えめで、あんまり自分の手柄を手柄として披露したがらない刈谷さんに、土日の家事手伝いについて話していただけたのは、几帳面さに話題が及んだから。刈谷さんもかなり几帳面のようにお見受けするが、奥様は数枚上手。

昭和42年のご結婚以来、家計簿を一日たりとも休まずつけてらっしゃるそう。だから刈谷さんは「とくにケチケ

▼休日は散歩と畑いじりのセットでストレス解消。奥様にわざわざ撮っていただいた一枚



チしたつもりはないが……」、高級住宅街の一角に気に入った家を見て、いまは無農薬有機栽培に凝り、散歩のノルマを果たすという口実で愛犬の竜を愛し、拾い猫モモを猫可愛がりする毎日を楽しんでいる。朝晩の散歩は欠かさず、仕事でやむなしという日には優しい奥さまのお力を借りながら、歩け歩け！で血糖値を低く抑える生活を心がけている。

長男長女ともそれぞれに居を構え、休みには「おとうさんの手作りギョウザがそろそろ届く頃ね！」などと、父の趣味の料理の腕を楽しみに待ってくれるような子どもや、四人の孫たちに囲まれ、「おかげさまで色々有難いことが多いねえ」と心から喜べる毎日を過ごしておられる。

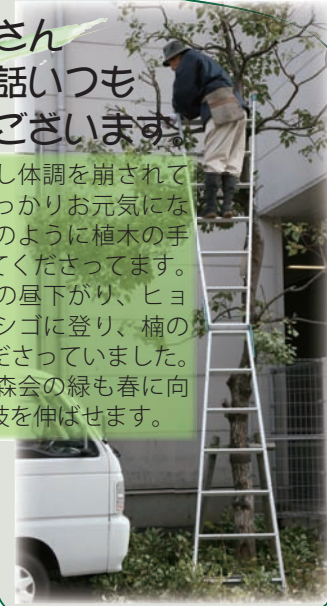
平穩無事で、順風満帆な生活。無理やり引き寄せたものではなく、毎日の過ごし方で結果的に手に入った穏やかさも知れないが、刈谷さんには尊くてかけがえのない、喜びのあふれる毎日だ。

▲薬剤部からの伝達事項をSPDスタッフに伝える刈谷さん

永井賢一さん 植木のお世話いつも ありがとうございます

永井さんは少し体調を崩されていたけれど、すっかりお元気になられて、また元のように植木の手入れに精を出してくださっています。

晴れた土曜日の屋下がり、ヒョイヒョイツとハシゴに登り、桶のせん定をしてくださっていました。おかげでまた近森会の緑も春に向けて思いっきり枝を伸ばせます。



バレンタイン 献血ご協力ありがとうございました



恒例のバレンタイン献血を今年も実施。勤務の合い間を縫って院内職員76名、院外の方26名、総勢102人もの方々が駆けつけてくださいました。その内、75名(200ccが37名、400ccが38名)の方々に血液を提供していただきました。御礼申し上げます。また血液センターの皆さま、受付を手伝ってくださった皆さま、ご協力ありがとうございました。

シリーズ●クリニック探訪15

松岡胃腸科内科

(高知市和泉町 3-25) tel.088-825-3325

高知市の北部で産業道路沿い、JR 高知駅の北方



▲院長・松岡 謙三。S18年4月1日、高知市出身。趣味は園芸、ゴルフ

消化管内視鏡を中心に迅速な検査をしています。胃内視鏡、大腸ファイバー、腹部エコー等の検査は絶食で来院されれば予約なしにその日に可能です。その他、血液や尿を調べる生化学検査もすぐに結果を出し、説明しています。また、病診連携に努めており、地域医療を充実したものにしたいと考えております。

診療科目 ● 胃腸科、内科
 診療時間 ● 午前 8:30~12:30
 午後 2:00~5:30
 休診 ● 日曜、祝日、木・土の午後



◀癒しの中庭を眺めつつ奥の診察室へ



お詫びと訂正

呼吸療法認定士

日本胸部外科学会、日本呼吸器学会、日本麻酔科学会が認定する呼吸療法認定士の第10回認定試験で合格率59%の難関を突破した皆さんを前号でご紹介しました。



が、森崎千春看護師は勤務の都合で撮影できなかったのに、写真説明でお名前を載せてしまいました、すみません。

で、撮影はしましたが、お名前が載ってなかったのは西村順子さんでした。ごめんなさい(『ひろっぱ』編集室)

1月の診療数	近森会 外来患者数	18,784人	企画情報室
	近森会新入院患者数	803人	
	近森会 退院患者数	748人	
	地域医療支援病院紹介率	89.92%	
	近森病院平均在院日数	16.32日	
	近森会 平均在院日数	25.13日	
	近森病院救急車搬入件数	402件	
	うち入院件数	216件	
	手術件数(手術室での)	222件	
うち全身麻酔件数	113件		



▲回復期リハ病棟全国大会でメイン会場の舞台を華やかにしてくれたリハ病院・内田陽子秘書の生け花作品

編集室通信

▼冬来たりなば春遠からじ、と思わせるほどに今年の冬は寒く、あったか高知でも数回雪が降り積もった。山間部では大雪に見舞われた。慣れない私たちは凍った道路で滑ったりころんだり。

● 3月の歳時記 ●

桃 (バラ科モモ属)

文・画 検査室 臨床検査技師 岸本 裕子



「桃」の字は中国から伝わったらしく、日本では、「兆ほどもたくさんの実(子ども)をならせる」と解釈され、安産をはじめ「強い生命力」の象徴とされたそうです。もともと、五節句(正月、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日)は女性のための日だったといえます。今では、三月三日を「桃の節句」といい、女の子の節句としたのもこの理由からだとか。

図書室便り

(1月受入分)

- ・新訂 身体障害認定基準及び認定要領 解釈と運用(補訂版)/障害者福祉研究会(監修)
- ・第36回日本看護学会論文集(看護教育)/(社)日本看護協会(編集)《別冊・増刊号》
- ・別冊 医学のあゆみ 現代寄生虫事情/多田 功(編集)
- ・老年精神医学 増刊号-(企)アルツハイマー型痴呆の実地診療をめぐる課題/松下 正明(他編集)
- ・エマージェンシー・ケア 2006年新春増刊 すぐ対等! 救急患者のアラームサイン/坂田 育弘(他編集)《ビデオ・DVD》
- ・Audio Visual Journal of JUA vol.12 No.1 / 日本泌尿器科学会(企画・監修)

スリッパ事故が多かった。さらに厳しい診療報酬の改定で赤くなったり青くなったり。そろそろ寒い冬に別れを告げて、春を呼び込む『ひろっぱ』にしたいものですね。(小)